



CSR視察レポート ミャンマー～ポリオワクチン接種の現場から～

2009年の7月よりスタートいたしましたMRI語学教育センターのCSR活動。毎月、受講生の皆さまからいただいた受講料の1%を寄付し、認定NPO法人「世界の子どもにワクチンを 日本委員会(JCV)」およびUnicefを通じて、世界の子どもたちへポリオワクチンを届けてまいりました。

この度、JCVが主催する現地視察ツアーに当センターのスタッフが参加し、実際にポリオワクチンがどのように子どもたちに届いているのか、その現場を見てまいりました。訪問国は、支援先のひとつであるミャンマーです。

現地の様子を全てお伝えすることはできませんが、写真と現地スタッフの説明などを基に要約してご報告いたします。今回のツアーを通じて、CSR活動の重要性を再度学ばせていただきました。

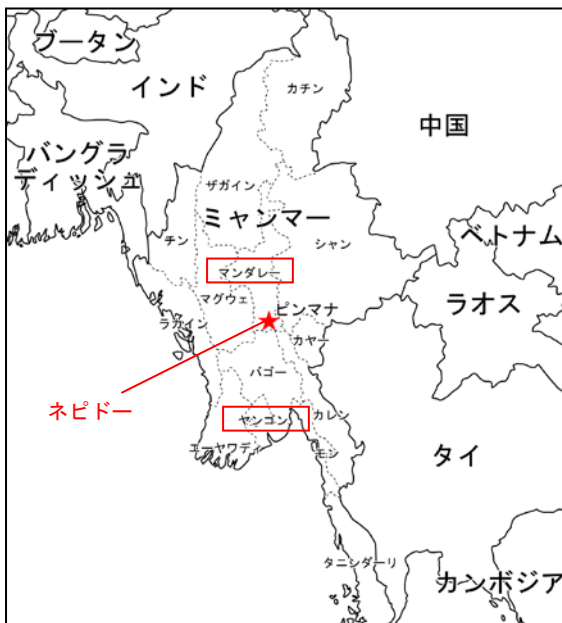
◆ 視察ツアー 概要

期間:2010年3月31日(水)～2010年4月6日(火)

国:ミャンマー連邦(Union of Myanmar)

地域:ヤンゴン・マンダレー

- 目的:
1. ポリオ・準全国一斉予防接種日(Sub NID)の視察
 2. コールドルーム／中央医薬品貯蔵庫など
コールドチェーンの現状視察



◆ ミャンマー基礎データ

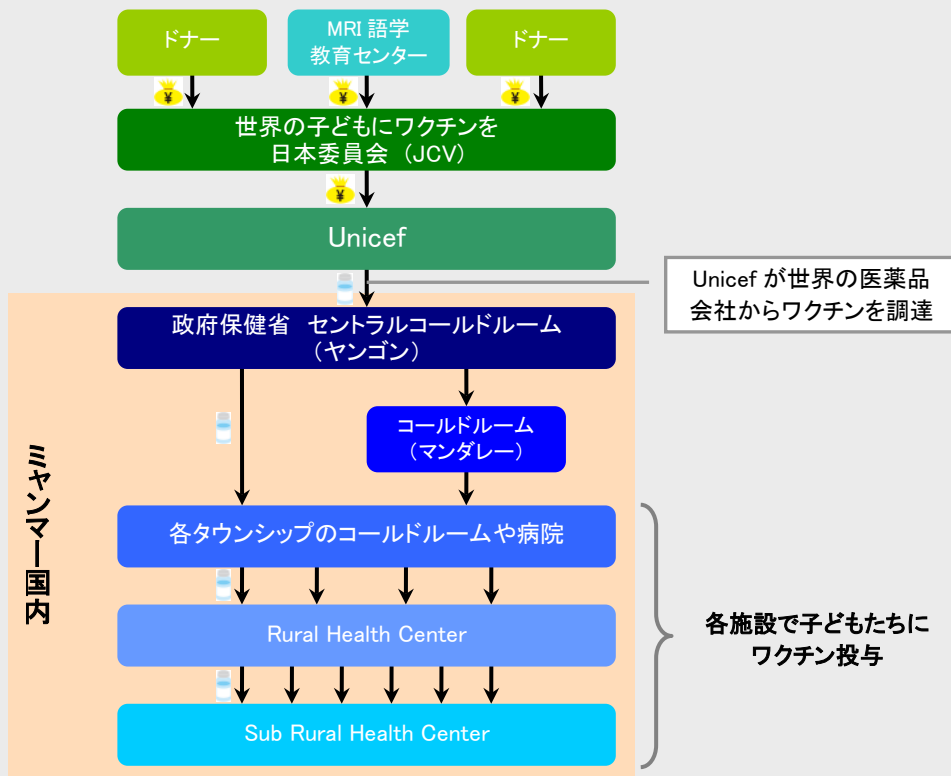
面積	約 68 万平方キロメートル(日本の約 1.8 倍)
人口	5,002 万人(2008 年度)
首都	ネピドー
最大の都市	ヤンゴン
民族	ビルマ族(約 70%)、135 に及ぶ少数民族
言語	ミャンマー語
宗教	仏教(90%)、キリスト教、イスラム教等



ヤンゴン市内景観

◎ワクチンが子どもに届くまで

<ワクチンの配布フロー>



私たちドナー(寄付者)が送った寄付金は、上図のようなルートを経て子どもたちにワクチンとして届きます。

Unicef が調達したワクチンは、まずはじめにミャンマーのヤンゴンにある保健省のセントラルコールドルームに送られ、そこから各地へと運ばれます。

ミャンマーでは、管区・州、郡、町、村という行政区があり、政府保健省のもと、その単位ごとに公立の病院やヘルスセンターが置かれています。入院施設が整った病院(タウンシップ病院やステーション病院)を頂点に、Rural Health Center(RHC)や Sub Rural Health Center(Sub RHC)といった小規模な診療所が置かれ、ピラミッド型の保健サービスが行われています。そのため、住民たちにとってもっとも身近なところにあるのは、RHC や Sub RHC といったヘルスセンターであり、ワクチン投与の多くは、こうしたヘルスセンターを拠点に町レベルで行われています。RHC や Sub RHC のでは電気設備がないところも多く、そうした場所ではクーラーボックスでワクチンを保存しています。



アマラプラタウンシップ病院の看護師さんと助産師さん



地方へはクーラーボックスを使用してワクチンを運搬します、中にはクーラーボックスを担いでゾウに乗ったり、川を渡ったりして届けなければならない場所もあります

●Unicef ミャンマー事務所を訪問(ヤンゴン)

視察のはじめに、Unicef ミャンマー事務所を訪問し、Unicef 安田先生よりミャンマーの保健医療の現状とコールドチェーンについてのレクチャーを受けました。

ミャンマーで1日に亡くなる5歳未満の子どもの数は、300~400人。割合にすると全体の約10%にあたり、1000人の子どもが生まれたら、5歳になるまでに約100人が亡くなってしまふ計算です。死因としては、肺炎、脳炎、下痢、敗血症、かっけ、マラリアなどが多いそうです。

ミャンマーでは、国内のワクチンの100%(薬は60%)を、JCVやUnicefなどの団体の支援によって調達しています。ミャンマーでは、政府予算の保健医療に占める割合は3%と非常に少なく、国内の保健医療はほとんどが支援により成り立っているのが現状です。こうした状況のなか、今後は、政府のコミットメントをいかに引き出すことができるかが課題となっています。

Unicefでは、1987年からミャンマーにおいてポリオの予防接種プログラムをスタートし、1995年から年に1回、NID(全国一斉予防接種日)を定めてポリオワクチンの全国一斉投与を開始しました。そうした努力が実を結び、2000年にポリオ撲滅(ポリオフリー)を達成しますが、2006年にバングラデッシュ経由でウイルスが侵入しポリオが再発。2007年からポリオワクチンの一斉投与を再開しました。



Unicef 安田先生によるレクチャー

◎予防接種の利点と欠点

利点

・ワクチンは安く、簡単に接種でき、かつほぼ確実に感染症を予防することができる

欠点

・ワクチンは熱に弱い → 冷凍冷蔵保存の鎖状化(コールドチェーン)で投与現場まで運ぶことが必要



冷凍保存が必須のポリオワクチン

◎コールドチェーンとは？

ワクチンは、熱に弱いので、一定の低温度(8°C以下)で保存しなければ効果がなくなってしまいます。ワクチンの効果を保ちながら、子どもたちのもとに届ける一連の手順や仕組み、またそのために必要な設備(具体的には冷凍庫や冷蔵庫、クーラーボックス、停電したときの補助発電機、輸送手段など)を「コールドチェーン」と呼びます。こうした低温の(コールド)鎖(チェーン)をつないで、子どもたちに有効なワクチンを届けます。

◎NIDとは？

National Immunization Dayの頭文字をとったもので、全国一斉予防接種日のことを言います。ミャンマーでは1995年から年に1回、NID(全国一斉予防接種日)を定めて、全国で一斉に5歳未満のすべての子どもを対象に予防接種を実施しています。それぞれの村ではできるだけ多くの子どもたちを集めるために、事前に案内を行ったり、お祭りのような催しものを行ったり、接種を受けた子どもにはお土産をプレゼントするなどあの手この手で接種率を向上させる努力をしています。

●コールドルームを視察(ヤンゴン、マンダレー)

ヤンゴンとマンダレーにあるコールドルームを視察しました。

コールドルームとは、いわば「ワクチンの冷蔵庫」。ワクチンは熱に弱いため、温度管理がとても大切です。ヤンゴンにあるセントラルコールドルームは、国際空港から近い場所にあり、海外から届いたワクチンはまずここに運ばれてから、ミャンマー全土にある 325 のタウンシップ(日本でいう市町村)に届けられます。まさにコールドチェーンの要です。



コールドルームの外観(ヤンゴン)



ワクチンが入っている冷蔵庫(ヤンゴン)



コールドルームにて保健省の先生による解説

ミャンマー北部に位置するマンダレーはヤンゴンに次ぐ大きな都市。ミャンマー全土 325 のタウンシップのうち、237 のタウンシップへはヤンゴンから直接ワクチンが運ばれますが、残りの 87 タウンシップへはマンダレー経由でワクチンが届けられます。



マンダレーのコールドルーム、ヤンゴンから届いたワクチンが保存してあります



コールドルームにて Unicef 国井先生による説明



保存されているワクチン

◎画期的な VVM (Vaccine Vial Monitor)

VVM とは、ワクチンの容器に貼付するシールのことで、温度変化により変色する性質を持っています。

熱に弱いワクチンは、運搬・保存の際に常に一定の低温度を保っていないと、効力を失ってしまいます。しかし、届けられたワクチンが常に温度管理された状態であったかどうかは、ワクチンを見ただけではわかりません。そこで登場したのが VVM です。VVM をワクチンの容器に貼付しておくことで、その容器に入ったワクチンが今まで適切な温度下に置かれていたかどうか、すなわちワクチンが有効かどうかを容易に判定することができるのです。



VVM の判定方法の説明書き

●sub NID 開始式に参加(マンダレー)

マンダレーにて準全国一斉予防接種デー(sub NID キャンペーン)の開始式に参加しました。

今回のツアーでは、4/3(土)、4/4(日)の2日間に、全325のうち81のタウンシップでsub NID(準全国一斉予防接種日)のキャンペーンが行われ、その一部を視察しました。



sub NID 開始式の模様



開始式を盛り上げる小学生



開始の宣言の後、壇上にて子どもたちにポリオワクチンが投与される

●各地の予防接種会場を視察(ヤンゴン、マンダレー)

マンダレーとヤンゴンにて、各地の予防接種会場を視察しました。予防接種会場となっているのは、地元の病院やヘルスセンターなど。どの会場に行っても、ドクター、看護師さん、助産師さんをはじめ、村の人々から歓迎していただきました。一人でも接種を受けない子どもが出ないようにするため、村をあげてのお祭りムードでNIDを盛り上げます。一張羅のドレスを着ておめかしして会場に来る子どもも少なくありません。ポリオワクチンは経口投与のため、目薬のような容器から口の中に液体を2滴入れるだけで終わります。また、ポリオワクチンは2回接種することで自己免疫力を獲得するため、1度目の接種から1ヵ月くらいの間隔をあけてもう一度接種します。

NIDのキャンペーンが行き届かないような国境付近や辺境の土地では、子どもを集めるだけでなく、保健所の職員が家を1軒1軒まわって子どもを探します。戸籍制度が日本ほど確立されていないミャンマーでポリオ撲滅を目指すには、そうした地道な努力が必要となってきます。



ヤンゴン管区サンチャウン郡区のヘルスセンター



歓迎の踊りを披露してくれました



ワクチン接種会場の様子



ワクチン接種を待つ親子



子どもたちへワクチン投与



ワクチン接種に来ていた親子



ワクチン接種会場の垂れ幕、ミャンマー保健省、WHO、Unicef、JCV のロゴが印刷されています

視察ツアーを終えて——

6 日間という限られた期間の視察でしたが、子どもたちに有効なワクチンを届けるため、さまざまな人々がそれぞれの立場から関わっているのだということを実感することができました。ミャンマーは軍事政権であるということから、欧米諸国からの援助が届きにくいという事情を抱えています。しかし、いざ、国内に入ってみると、国民の 90%が敬虔な仏教徒であり、この世で最大の奉仕をすることが功德につながるという教えのもと、日本で忘れ去られた豊かな心を持った純粋な人々が街中に溢れています。今回のツアーから、私たち日本人は「アジアの共生」をもっと真剣に考えていかなければならないということを教えてもらいました。



出家する子どもたちを囲む行列、シュエダゴンパゴダにて



ヤンゴン市内の様子、街中を走る車はほとんどが日本製でした